

No.63
2026年3月

岡山県
生涯学習
センター
だより

学びing



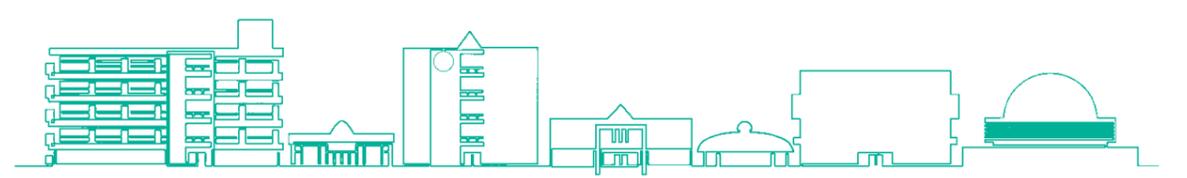
生涯学習センターでの学びを日々の生活に生かし、豊かに生きることにつなげている人たちの現在進行形を紹介しています。

地域づくり
Community development

つながりづくり
building Connecting

人づくり
active Citizens

センターだよりNo.63「学びing」をお読みいただきありがとうございます。感想を二次元コードよりお寄せいただけると幸いです。



Okayama Prefectural Lifelong Learning Center

発行：岡山県生涯学習センター
振興課 ☎086-251-9751

〒700-0016 岡山市北区伊島町三丁目1番1号
<https://www.pal.pref.okayama.jp/>
<https://www.facebook.com/okasyogaise/>

開所時間 火曜日～土曜日：午前9時から午後9時まで
日曜日・祝日：午前9時から午後5時まで

休所日 月曜日(その日が祝日に当たるときを除く)
祝日の翌日(その日が祝日でない火曜日から金曜日までに当たるときに限る。)
12月28日から翌日の1月4日まで

アクセス 車 JR岡山駅西口から約5分/山陽自動車道岡山I.C.から約10分、伊島小学校前を西進、つきあたり
バス 岡電バス：JR岡山駅西口から中央病院線京山入口下車徒歩8分(所要時間約13分)
徒歩 JR岡山駅西口から約25分(約1.7km)
※駐車場には限りがありますので、できるだけ公共交通機関を使ってください。
※カーナビゲーションで「岡山県生涯学習センター」が見つからない場合は、「岡山県立鳥城高等学校」と入力してください。



つやま人を “おもしろがれ”

津山市地域振興部生涯学習課 主事 芳原 茉穂



この事業は
生涯学習・社会教育関係職員研修講座
初任者研修

生涯学習・社会教育関係職員及び関係施設職員等で勤務年数が少ない方、基礎的な知識を学びたい方を対象に、生涯学習・社会教育行政の推進に必要な基礎的知識・技能の研修を行い、生涯学習推進者としての資質の向上を図ります。また、参加者のネットワークづくりを支援します。

社会教育行政の現場で、地域の課題に真面目に向き合い、おもしろがって解決していただける人材を養成します。



VOICE

津山市地域振興部生涯学習課 主任 井口 琢朗

「つやまニア」を引き継いで、登録者の方の初めての講座をお手伝いしたところ、自信をつけた登録者の方が、2回目3回目の講座を自ら企画して行うなど、活躍の場が広がっていると実感しています。

芳原さんと一緒に仕事をしていると、彼女が本当に仕事を楽しんでいる様子が伝わってきます。アイデアやロジカルな考え方もさることながら、前向きなマインドを持っているんです。自分も津山をもっと魅力のあるまちにしたい、津山のことをもっと好きになってもらいたいです。それを仕事にできるってこんなにいいことはないって思っています。

映画館も遊園地もない、何も無い地元がずっと嫌いでした。でも何もしていないのに悪く言うのは違うな、どうせなら地元を“おもしろく”したいなと思い市役所に入庁しました。

津山市には教えたい人と学びたい人をマッチングする「生涯学習人材バンク」という事業があるんですが、「依頼がないため辞めます」と登録を解除する方がいたんです。最初は地域の役に立ちたいという思いがあって登録されたはずなのに、自分たちが思いに寄り添い、サポートできていなかったことを、すごく反省しました。もうちょっと登録者の方と行政が近くなれば、登録者の方が生き生きと活躍できる事業になるんじゃないかなと考えて生まれたのが「つやまニア」です。

初任者研修のときに西粟倉村が「村民講師」という事業を発表していたのを思い出し、そのときの「つながり」を生かして西粟倉村の担当の方に相談して、「つやまニア」のやり方を考えました。登録するだけでなく、企画書を応募してもらおう形に変え、広報や運営など一緒にやっていったんです。他の市町村にその企画書を紹介する機会もあり、登録者の活躍の場がどんどん広がっています。

「つやまニア」を通じて、多くの企画書が集まり、応募者の熱意に驚きました。『自分の好きや得意を追求し、公民館で定期的に活動したい』『登録するだけでなく、こういう場自体がもう報酬なんだ』という声をいただくと、やってよかったなと思いました。

社会教育に携わるようになって思うのは、この世界にいる人たちで“おもしろがり力”がめっちゃくちゃ高いこと。人がやってる事業とか、興味があることについて「なんでそう思う?」「どうやったらできる?」を考え、その一つひとつのことに対して「ふーん」で終わるんじゃなくて、「自分もできないかな」「こうアレンジしたらもっと良くなるな」と工夫する“おもしろがり力”がすごく高い先輩方がたくさんいるんです。だから自分も“おもしろがって”やりたいなあと思っています。

今後は、自分がいる時しかできない事業は継続性がないと思っているので、次の担当者やその次の担当者に分かりやすく伝える工夫や、“おもしろがり力”を引き継いでいきたいです。そのためにも、自分がこういう考えに至った経緯や、「未来の津山はこうなるといいよね」というビジョンを残しておくことが必要だと思います。今は、働く世代の「アフターファイブの過ごし方」としての学びの場を提案したいと思い、11月から実施しています。“津山っておもしろいことやってるな”って周りから思われたいんです。

Story

02

夢を語ると、 ミライはおもしろくなる

平林金属株式会社 エコ便統括管理課 堀野 悠子



「ココロうごく未来のジブン発見!」の話をいただいた時、これまで子どもたちとともに将来を考えるような取組をやったことがなかったので、職員とどんなことができるか話しているうちに「やってみたい!」「子ども達に違った形で平林金属を発信して行こうよ」ってこちらの気持ちも盛り上がってきました。

仕事を淡々とこなしてる日々の中で、自分は常に“どうありたい?”この先“どうなりたい?”って、夢を再確認するというのは、私にとってはすごい大きなことでした。

子どもとの対話の時に「楽しく生きる!」って書きました。考えて、やっぱりこれだと思って。実際、仕事を楽しんではいらんですけど、もっともっとこうしてみたい!楽しみたい!って改めて思ったからです。

子どもたちは、最初は自分の言っていることに自信がなさそうで、大丈夫かな?と聞いていたんですけど、「それいいね、すごくいいよ」って、声をかけると、目がキラキラって変わるんですよ。その表情は最初と全然違いましたね。そこから言葉数もすごい増えてきて、お互いの距離が近くなったように思います。

お互いに認められる空間だから、自分の思ったことを素直に発信できるっていう空気を強く感じました。話している中で、「私たち間違える事があるよ」って伝えました。「大人だって間違えることもあるし、夢を持って失敗することもある。失敗しても次はきっと成功するようにチャレンジしようって思えるんだ。」と話したら、ある子どもが「大人は失敗を見せないようにしてるのかな?」と言ったんです。大人も同じように失敗して、チャレンジして成長をくり返しているということが伝わったように感じて、さらに距離が縮まった瞬間だったと思います。

人って認められたら嬉しいですね。それは子どもも大人も同じだと思います。

対話が終わった後、もらった“いいね”の中に「元気があっていい」っていうのがあったんですけど、これまで自分では意識してこなかった部分で、そんなところも“いいね”って思ってくれるんだと思って嬉しかったです。

「ココロうごく未来のジブン発見!」が私の中ですごく生きてると実感したことがありました。

大きなフェスタの企画運営を任されて不安だらけでしたが、困難なことがあっても前向きな思考に方向転換できるようになったんです。「もっとこうしたい」「楽しみたい」を実現するためにはどうしたらいいかと考えられるようになりました。

子どもたちが今後、興味のあることに打ち込んだり、夢に向かって挑戦したりするときに、「あの人がこんなこと言ってたな」「大人も毎日をしっかり楽しんでいいんだな」ってふと思ってくれたらいいですね。あんな大人になれたらいいなって思い出してくれたら一番うれしいです。

VOICE

ファシリテーター

あわくら会館・図書館 副館長 白岩 将伍



今回の働く大人たちは、子どもの目線に立ち、互いに認め合い誰でも自分を表現できる空間を作られていました。その空間で、工場見学や体験活動や対話を行ったので、子どもたちは仕事をとおして大人を見ることができ、自分と照らし合わせて考えることができたんだと思います。何より、大人たち自身がこの場を思いっきり楽しんでいる姿を見せていたのが印象的でしたね。ご自身の思いを一生懸命、嬉しそうに語っているから、そこにみんな惹かれていました。

子どもと大人の心の距離が縮まっていき、終わりにはずごくいいチームが出来上がっていましたね。

この事業は

「ココロうごく未来のジブン発見!」
～見て・聞いて・出会って・話して
あなたから学ぶことの楽しさを知る～

小学生から中学生までの子どもが、働く大人と出会い、対話します。大人たちの仕事に対する思いやこれまでの経験を聞いて、子どもたちは自分の未来を考えます。子どもたちは、いろんな大人がいることを知り、将来、自分の力で自分の進む道を決め、大人たちはこれまでを振り返り、自分のこれからを考えるきっかけづくりの場。

対話をととして、大人と子どもが認め合い、それぞれが自分の“これから”に主体的に向き合うことを目指します。

楽しむ子育て つたえ隊！

美作市家庭教育支援チーム たんとんとん

綱島邦子 石原美和 安東容子 安東明美

梅澤とし子 村井みゆき 金藤千晶 清水裕子

講座へ参加して下さった方が
楽しそうに活動されている様子
を見るのが自分の喜びになり、
人とつながることのありがたさを
感じることができました。

チームで事前の準備や練習に
取り組んだことによって、
学びを深めたり視野を広げたり
することができました。
チームの力はすごいな
と実感しました。



子育て期間中はなかなか
余裕がないと思いますが、
少しでも子育て期間を
楽しみながら大切に
過ごしてもらえよう、
私にできることを
今後も取り組んでいきたいです。

「出会い」が、その人の
その後の人生を変えるので、
この講座が、
そのような「出会いの場」に
なってくれたことを
とても嬉しく思います。

中山芳一氏の「非認知能力」に関する研修を受けて、その考え方に感銘を受けました。お話を聞いて、楽しく豊かに子育てをするには「非認知能力」を意識することが大切だと実感したんです。そして、二年前に開催された保護者向け講座へ参加したことで「この内容を美作市でも伝えたい！」と強く思うようになりました。

昨年度、当講座を修了し、ファシリテーターとして活動する資格を得たことで、今年度、美作市での開催が実現しました。講座を開くにあたり、チームで何度も練習を重ねました。研鑽を積むことによって、テキストを読めば読むほど「非認知能力」についての理解が深まりました。また、メンバーそれぞれの持ち味にも気づくことができました。人前で話すことが得意、リーダーシップを発揮できる、ICT 関連に長けており広報活動ができる、さらにみんなを繋ぐことができるなど、たくさんの強みが集まってこの講座はできました。さらに受講者と共に一体感を感じながら講座を創りあげることができたのは、大きな喜びでした。この経験は非常に嬉しく、私たち自身が充実した時間を過ごすことができました。

それに参加者の皆さんと「つながり」をもてたことにも大きな喜びを感じています。講座が終了した今も参加者の皆さんと交流がしたくて「同窓会を開きたいな」と思うほどです。「非認知能力レンズ」をもって子ども達と接している皆さんの気づきを持ち寄って、おしゃべりしながら共有できたら、もっと子育てが楽しくなると思うんです。

「非認知能力」講座を通して、メンバーを含む受講者全員が自分の言葉で思いを伝えることができ、私達も多くの事を学ばせていただきました。それぞれが成長し、講座での学びを日常生活に生かすことができていることも嬉しく思っています。この講座は、他者との関わりに大きな影響を与える力をもっていると実感しました。

「非認知能力」の魅力をより多くの人へ伝える活動は、今後も続けていきたいと考えています。毎年の開催は難しいかもしれませんが、「親育ち応援学習プログラム」等の活動を通じて、より多くの方にその重要性を伝えていきたいです。そして、「非認知能力レンズ」を使って、「子育てって楽しい！」を伝えていきたいです。



VOICE

津山教育事務所
社会教育主事（主任） 英 かおり

講座初日を迎えるまでは不安を感じていたようですが、第2回目の前には、チーム員同士で高め合う雰囲気ができ、受講者へどう伝えるのがよいか切磋琢磨されていました。最終回では、講座を受講して下さった方への感謝の気持ちをどう伝えるか、笑顔で相談されている様子が印象的でした。毎回、あたたかい雰囲気の講座だったので、受講者の皆さんとの距離がどんどん近くなっているのを間近で感じました。みんなできつながり、一つの事を創りあげるっていいなと実感しました。

この事業は
就学前の非認知能力育成支援のための
人材養成研修会

家庭教育支援者、教職員等を対象に非認知能力の育成に特に重要な時期とされる就学前の子どもたちへの関わり方を保護者等が学べるように「就学前の非認知能力育成プログラム」を家庭教育講座等で進行できるファシリテーターの養成を図ります。
※ファシリテーターとなった方は、保護者向けの非認知能力育成学習プログラム（全3回）を実施できます。

Story
04素敵なものは
“好き”と“ワクワク”

小学校5年生 涉 千尋



もともと、「ファーブル昆虫記」をよく読んでいて、小川にいるサワガニやザリガニ、バッタなどの生き物にふれることが大好きでした。カエルも大好きで、素手でさわれちゃうんです。

小学3年生の時に1冊の本に出会いました。主人公は自然が大好きで、帰り道に見つけた素敵だなと思ったものをポケットいっぱいに入れて帰ります。毎日のように自然の中の“素敵なものさがし”をしていて、大人になっても自然を大好きなまま、自分の好きなことを続け、新種の恐竜の化石を発見したんです。

私も学校からの帰り道に“素敵なものさがし”をやっていました。どんぐりや長い棒、道路に白い石が落ちていて、星の欠片だと思って拾って帰ったら、凍結防止剤だったこともありました。周りの人からは「変だよ」と言われることもあったんですが、本の主人公のように、好きなことを続けていきたい、大好きな自然をもっと調べてみたいと思っていました。そんな時に「宇宙の学校®」っていうのがあるのを知って、私の“もっと調べてみたい”ができるんじゃないかと思って応募しました。

これまでも体験学習に参加したことはあったんですけど、年上の人に甘えることが多かったです。でも、「宇宙の学校®」では、グループの中で私が最年長だったので、積極的にグループの子と話をし、グループのみんなと協力できるように考えて、実験や工作に取り組みました。いつも張り切って参加していて、実験が無事に成功すると嬉しいし、葉脈標本を使った工作では、広葉樹と針葉樹の葉脈の違いについての質問に、講師の先生が丁寧に答えてくれて嬉しかったです。家に帰った後も、スクーリングでやった実験の中で感じた「なんでだろう」の答えを見つけようと、家族で図鑑を見たり、熱気球をドライヤーとビニール袋を使って、実際にやってみました。

毎回“ワクワク”と“なんでだろう”がいっぱいで、もっと宇宙のことを知りたいって思うようになりました。いつか宇宙飛行士になって、大好きな生き物と一緒に宇宙に行きたいと思っています。「宇宙の学校®」は、とっても楽しいので、来年も絶対参加したいです。

Family's EYE



コロナ禍で、何もできない時期があったので、それまでの分も子どもにはできるだけ体験をさせてあげよう、色んなことに参加していこうと家族で決めたんです。自分が小さかった頃には様々な職業を見る機会も少なかったで、子どもには体験を通して様々な仕事を見せてあげたいと思っていました。「宇宙の学校®」の後、図書館へ行って調べていく中で、次々と興味が湧くようになってます。「じゃあ、これはどうなっているんだろう」と、一緒に考えていく中で、自分もこれまで興味が無かったことに新たな発見があり、私達もおもしろさを共有させてもらっています。

VOICE

「宇宙の学校®」ボランティア 藤田 正樹

「紙とんぼ」の工作の時には、どうすれば高く飛ばせるか、保護者の方も夢中になっていました。でも、子どもの方が上手に飛ばせる場合もあり、うまく飛ばせずちょっぴり恥をかいた形の親が、そこから子どもと一緒に高く飛ばす方法を考えていく様子は、とても微笑ましかったです。何でもできると思っていた親が上手くできないところを見るのは、子どもにとっては新鮮でしょうし、記憶に残る体験になったのではないのでしょうか。

「宇宙の学校®」では、親子で同じ講座を受講し、同じ経験・時間を共有しています。その際、子どもの興味関心・理解度なども隣で見ているので、保護者の方には、その時だけで終わらせず、家に帰った後も引き続き一緒に取り組んで、家族みんなで「科学する心」を育ててほしいと思います。

私も「宇宙の学校®」にボランティアとして参加して、小学生の時以来ワクワクしています。大人になったら、「常識だから」と、深く考えずに済ませてしまいがちですが、子どもたちには「なんで？」からわき起こる「ワクワク」をずっと感じ続けられる人になってほしいですね。



この事業は

岡山県「宇宙の学校®」

宇宙航空研究開発機構（JAXA）宇宙教育センター、認定NPO法人子ども・宇宙・未来の会と連携した「宇宙」が素材の科学教育活動として、小学生とその保護者を対象に実施しています。年4回のスクーリングと家庭での学習（レポート作成）に取り組み、子どもの科学に対する、ワクワクしたり、チャレンジしたり、豊かに発想したりする気持ちを育てます。

“宇宙から地球を見る”宇宙で活躍する技術や考え方は自分たちの身近にも存在することを知っていきます。

Story
05

ジブンの世界が ひろがった

岡山大学 川上 紗佳

「社会経験」を積みたかったんです。

大学と自宅を行き来するだけの生活に、「これでいいのかな?」と、ちょっと危機感を持っていました。卒業して社会人になったら、いろいろな人と関わっていかないといけないので、普段関わらないような人と一緒に何か活動してみたいなと思って、ボランティアを探し始めたんです。年上の方とも接する機会が欲しかったので、「ぼるボランティア」に参加しました。

最初は、本当に緊張しました。ベテランの方がたくさんいらっちゃって、ベテランの空気みたいなのがあって、みなさんテキパキとされていたので、「私、大丈夫かなって」。でも、参加するうちにちょっとずつ勝手に分かってきて、周りを見て、「こういうことをしたらいいのか」と、見様見真似ですけどできるようになってきました。

イベント中は参加しているお子さんとその保護者の方が安全に自主的に楽しんでもらえるように心がけています。「それとなく、そっと助ける」を目標に毎回ボランティアに参加しています。ボランティアとして私の顔や名前を覚えてもらうことは大事なことでないですね。私が参加した方の記憶に残る必要はなくて、イベントの参加者の方が「つまらなかった」とか、実験で「危なかった」と思うことなく、楽しんでもらえたらそれが一番嬉しいです。

「ぼるボランティア」の人って、年齢とか性別とか職業とかボランティア歴とか出身地とか、趣味も特技も好きなことも嫌いなことも、似ているところもあれば違うところもあるじゃないですか。みんなで話をしていると、自分で考えつかない視点や発想が得られるんですよ。それが楽しいです。年代の違う方と話す機会って、すごく貴重じゃないですか。そういう方に普段聞けないような話も教えてもらえるので面白いですね。ボランティアが始まる時に「よろしくお願いします」、帰りの時に「ありがとうございました」とあいさつして、一緒に活動して、会う機会を重ねていくと、ちょっとずつ親近感というか・・・仲間意識がわいてきます。自分と全然違う人とも、ボランティアを通じて関わっていき、仲良くなれるというのは、「ぼるボランティア」の大きな魅力だなと思います。

それに、「ぼるボランティア」は、「来たい時に来ていい」というスタイルだから、「授業の合間に行ける」「今日休みだから行けるな」って感じで、気軽に参加できます。大学3・4年になって、就職活動なども出てくると思うんですけど、それでも行ける時があれば「ぼるボランティア」に参加したいし、社会人になっても、出来る限りは続けたいです。



この事業は

ぼるボランティア

岡山県生涯学習センターで活躍する私設ボランティア。JAXAと連携した宇宙教育のイベントや子ども向け大規模イベントのスタッフとして活動しています。自主的な活動として、子どもから大人を対象とした「ものづくり教室」を行っています。自己実現や社会参加を目的とした自発的、自主的なボランティア活動を行うことを目指しています。

VOICE

ぼるボランティア 有本 雅彦 中田 照子

川上さんの「ボランティアをしたい」という気持ちをすごいと感じています。「ぼるボランティア」の活動は学校では学べないことなので、これからもこの機会を通していろいろなことを伝えていけたらと思っています。

現在、「ぼるボランティア」は私たちにとっても、心地よい居場所になっています。いろいろな人と出会って、いろいろな体験ができるからです。その中に若い人が入って来てくれることで、私たちも元気をもらって帰れます。そんな小さな出会いがどんどん広がっている気がします。

